

教 仁 名 聞

第 2 3 号
(発行日)

2 0 1 2 年 8 月 1 日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒 6 6 3 8 1 1 3 西宮市

甲子園口 2 丁目 7 - 2 0

電話・FAX (0 7 9 8)

6 3 - 4 4 8 8

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月 2 2 日 午後 2 時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月 2 日と 1 2 日 午後 3 時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月 6 日 午後 7 時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月 1 8 日 午後 6 時 3 0 分始。

* 8 月 は 2 日 の念仏座談会と 6 日 の聖典学習会以外は休み。

倫理と苦悩と念仏

私が最初にお会いした仏法の師(善知識)は佐々木蓮磨師であった。それ以後、師が往生されるまで十数年間、親しくお導きをいただいた。

師はお説教でしばしば、阿弥陀仏は「そのまま念仏してこい。全ての責任は弥陀が引き受ける」「そのまま称えるばかりで、汝の責任は弥陀が受け持つ」と、力強くお話になった。

ことに若い頃の私は、死や死後が問題になっていたのではなくて、心の底の憂鬱な気分をもちつつ、いろいろなことに義務や責任を感じ「ああもしなければならぬ。こうもしなければならぬ」と、出来しななければならぬ」と、出来が多かった。そういう時に、師のこのお言葉は私の心を軽くしてくださり、お念仏を申すことへと私をうながしたのであった。

佐々木師は弥陀の本願をこのような言葉で力強くハッキリ

りと仰せになったのであるが、もしこの言葉を聞いていなければ、若い頃から真宗に飛び込んでいくほどの動機は私に起こらなかつたであろう。師の御恩をあらためて感じるのである。

明治時代にすでにそういう問題を大きな苦として感じ、そこに救いを見出されたのが、佐々木蓮磨師がことに尊敬されていた清沢満之師であった。清沢師はわずか四十一才で亡くなられた近代の宗教的偉人であるが、師の絶筆である『我が信念』の中に、「言葉を慎まねばならぬ。行いを正しくせねばならぬ。法律を犯してはならぬ。道徳を破りてはならぬ。礼儀に違うてはならぬ。作法を乱してはならぬ。自己に対する義務、他人に対する義務、家庭における義務、社会における義務、親にたいする義務、君にたいする義務、夫にたいする義務、妻にたいする義務、兄弟にた

いする義務、朋友にたいする義務、善人にたいする義務、悪人にたいする義務、長者にたいする義務、幼者にたいする義務、

にたいする義務、いわゆる人倫道徳の教えより出づる所の義務のみにも、之を實行することは決して容易のことではない。もし真面目に之を遂行せんとせば、終に「不可能」の嘆きに帰するより外なきことである。私はこの「不可能」に衝き当たりて、非常なる苦しみを致しました。もしこの如き「不可能」のこのためにどこまでも苦しまねばならぬならば、私はとつづくに自殺も遂げたでありましょう。」と述べ、そういう苦しみの中にある自分に「無限大悲の如来は、如何にして、私に此の平安を得しめたまふか。外ではない、一切の責任を引き受けて下さるることによりて、私を救済したまふことである」と述べておられる。

また、阿弥陀仏は「汝等衆生、一心正念にして我に來たれ、我汝等の善と悪と智と愚とを問わず、一切汝等のためにその責に任じ

て、汝等を撰受すべし」(『清沢文集』)と私たちに仰せ下さっている、と清沢師は述べておられる。

このような清沢師の信仰は師の門下であった多田鼎師にも影響を与えたのである。多田師が弥陀の本願にであつて、弥陀の本願を「私は如何にしたらば善いか」という処に聞こえて下さった「唯称えよ」の「おおせ」は、私の全分を引受け下さる「おおせ」でありました。「願わくば我が昨非を語らしめよ」と表現されている。

そして清沢師と多田師の教えを深くいだかれた佐々木蓮磨師は、弥陀の本願を「そのまま念仏してこい。全ての責任は弥陀が引き受ける」と表して下さったのである。佐々木師が弥陀の本願をこのような言葉でハッキリと示されたのは、確かな信仰経験に裏打ちされたことである。弥陀の本願、念仏の仰せが倫理上の苦を救う仰せであることを、佐々木師以後の真宗者でハッキリと語る人は

寡聞にして知らない。

実際、日々何に思い煩うかというところ、こういう責任問題ではなかるか。

妻に対する責任、夫に対する責任、両親に対する義務、子どもに対する責任、隣人に対する義務、友人に対する義務、国民に対する義務、隣国に対する責任、困窮している人たちに対する責任、差別されている人たちに対する責任、抑圧されている人たちに対する責任、自然環境に対する責任、地球に対する責任、未来の日本人に対する責任、日本の教育・裁判・医療・政治に対する責任など、あるいは真宗大谷派が取り組んできた同和問題、靖国問題、死刑制度の問題など、もしこれらの問題を「真面目に之を遂行せんとせば、終に不可能の嘆きに陥るより外はない。そして清沢師がいうように「もしこの如き不可能のこのためにどこまでも苦しまねばならぬならば、私はとつとつに自殺も遂げたでありましょう」とまで行きつくに違いない。

私は今も大なり小なりこう

した義務や責任問題に悩むが、そのつど、念仏しつつ「私の全分を引き受けたもう」阿弥陀仏の仰せに助けられて、阿弥陀仏に私が重荷をすべて担っていただきながら、現在にできることをしつつ、生きさせていただいている。

それは「阿弥陀仏に甘えている」と云われても、あるいは「阿弥陀仏の慈悲に居直っている」といわれても、あるいは「欺瞞的な自己肯定だ」といわれても、この念仏に帰するほかに生きようはない。阿弥陀仏に身をゆだねて、今ここで私のなし得ることをなしていくほかに私の道はないのである。

少なくとも私においては、この場においてのみ、生きることができるのである。「申しわけございません」と謝りつつ、阿弥陀仏に感謝しつつ、ここに唯一私のおり場が与えられるのである。(了)



後齒 2
(C)SHOGAKUKAN INC.

正信偈に学ぶ問答

(四十四)

道綽決聖道難証 唯明浄土可通入

(書き下し) 道綽、聖道の証しがたきことを決して、ただ浄土の通入すべきことを明かす。

(現代語訳) 道綽禅師は、聖道門の教えによつてさとするのは難しく、浄土門の教えによつてのみさとりに至ることができることを明らかにされた。

*

D「ここからは七高僧の道綽禅師のお徳を讃えられた箇所に入ります。道綽様は五六二年に生まれ、六四五年に往生されました。中国の山西省に生まれ、十四才で出家し、四十八才の時、玄中寺にあった曇鸞大師の碑文を見られて浄土教に帰依されました。玄中寺に住して浄土の教えを説き、ことに称名念仏を民衆に広くお勧めになりました。禅師は自らの求道経験と時代の有様を深く内省され、(今の

時代は聖道門の道ではさとりに到底おぼつかない) ことを痛感し、浄土の教えのみさとりにへの道は有効である、と教えられたのです」

A「なぜ聖道門の仏教はさとることが難しいと言われたのですか」

D「釈尊が涅槃にお入りになつて後、五〇〇年間は正法の時代といつて、修行してさとりを開くことができるけれども、その後の一〇〇〇年間は像法の時代といつて、一応教えがあり修行する人はいるが、さとりを得ることは非常に難しく、さとる人はほとんどいなくなる。そしてその後は末法の時代に入つてしま

い、もはやまともに修行する人もなくなつて、ただ仏教の教えのみがあるだけの状態になつてしまふ。そして道綽様は(今はもう末法の時代に入つてしまつていて。このような時代においては聖道門でさとりを開くことは無理であり、すみやかに浄土の教えに

帰すべきである) とおすすめに

A「実際の仏教の歴史ではこのような正法、像法、末法というような歴史観にそつていたのでしょうか」

D「こういう正像末の三時という歴史観は一つの信仰的立場による見方ではありません。ですから必ずしもこの歴史観通りに仏教(聖道門)が辿つたとはいえないかもしれ

A「現実の状態からうなずかれたのですか」

D「そうですね、現代という時代も、やはり釈尊の時代とはかけ離れてしまひ、釈尊の感化力は衰え、真面目に修行する人も極めて少なく、いわんや修行によつて煩惱を断じた聖者のさとりを實現する人はいないといつていいのではないでしようか。まさに現代は末法も末法、末法のだ真ん中という感じがします」

A「今や末法そのもののような現代に釈尊や直弟子たちと同じような道を歩んでさと

信心夜話

(太子の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感)

を開くというようなことは、もはや不可能であると実際いえますね。道綽様は聖道門は今や不可能なさとりの道だから浄土の教えに帰してさとりを完成させなさい、と仰せられるのは現代の私たちにこそ受けとるべきおすすすめですね

D「ええ、そういうことです」

A「浄土の教えはなぜ末法の時代においてもさとりを得ることが出来るのでしょうか」

D「浄土門は、阿弥陀仏からさとりの因そのものである南無阿弥陀仏をいただくばかりで、浄土に生まれ仏のさとりを完成させていただく道だからです」

A「凡夫の側の難しい修行が求められていないのですね」

D「ええですから、この法こそ末法の時代そのものの現代において私たちがしたがることのできる法なのではないでしょうか」

(了)



『一蓮院談合録より』

画像はクリックして拡大してください

をいただける不思議な教えである。

師云。聞いて聞いて聞きぬいたものと、初めて聞いて御助けを喜ぶものと、どちらが仕合わせじやと云うと、初めて聞いて信じたものが、宿善が厚いのじゃ。

(この場合、何を聞くのであるかと言えば「我が名を称えよ、必ず助ける」「まるまる引き受ける」の仰せを聞くのである。この仰せを聞いて、「ああ有難い、こんな私を」と受けとるだけ。これだけで永劫の幸せをいただけるのである。何とも単純無比なのである。この仰せを初めて聞いて、これを素直に「ああ阿弥陀様がこんなどうしてみょうもない私を助けて下さるのであるなら、なんと恵まれたお方であろうか。阿弥陀仏の本願のお助けはどれだけ聞かねばただけぬという条件はない。今聞いて今ここでお助け

をいただける不思議な教えである。

にはおかない」との阿弥陀仏の大悲がましますのである。)

仰せに。何なりとも小言が云えるなら云うて見よ。有り難う御座りませんと云うと、有り難うのうても其のまま助けてやる、喜べませんと云うと、喜べぬなりで助けてやると云うとある。それが如来様の仰せじや。あまり理屈もないようだが、これが誓願の御不思議と云うものじゃ。

(南無阿弥陀仏のいわれは、「タノメ、タスケル」の仰せである。タノメとは「任せよ、遠慮なく私にそのまま任せてくれよ」の仰せである。しかるに「なかなかお任せできません」と、十中八・九の人が言う。よく聞法している人で

も「阿弥陀様は任せよとおつしやるけどなかなかお任せできません、阿弥陀様をたのめません」と小言を言う。それは一つには、何とか助かりたい、この事一つをなんとかしてでも解決したいという、切迫した聞きようになつていない、ということがあろう。しかし一番は、阿弥陀仏が「タノメ、タスケル」と仰せ下さるのは、私の方に弥陀をたのむ力も、任せる力もなく、また真剣に法を求め心のない私をすでに見込んで、「たのめぬ、任せられぬという、そんなお前だからこそ、我にそのまま任せてくれよ、助けさせてくれよ」と仰せ下さる阿弥陀仏の広大な大悲、誓願の御不思議をよく聞いていないからである。

(了)

《盂蘭盆会法要》

八月十日 (金)

午後二時始まり

* * *

- * 八月十二日と八月二十二日の集まりはありません。
- * 八月二日 (座談会)・八月六日 (聖典学習会) はあります。
- * 九月六日の聖典学習会は留守のため休みます。

木村無相さんの法信3

金子先生があるところで
「信心とはお念仏一つをよるこぶ心である」

と申され、香樹院師は
「お念仏でハラをふくらせよ」

又は

「念仏していて、ナニ、不足があるか」とおっしゃられるのは、大悲廻向のお念仏。「ただ念仏せよ」のお念仏を、よき人の仰せのままにいただと、お念仏に心満たされ、今生でサトリは開けぬが「助かる」ということになるのであります。う。で結局は、ドナタがホンモノかわからぬなら、一層、聖人だけはホンモノと思ふほかないので、聖人の書かれたものに、モツパラ食い下がるのが一番よくはないでしょうか。

お手紙に
「ただいつも思われますことは、木村様が申される如く、宗祖に徹底的につくということ、宗祖の教えにひたすら随順することといわれた、その事が大切だ」とこの頃、特に思うことであります。

とあり、おいおいとそういうことにならされることでありましょう。ありがたいことです。

することが大切
と思えます。宗祖の教えにヒタムキに聞いていると、そのウチにオノツカラ、〈随順〉ということになって来ることでありましょうから。

お念仏についても香樹院が

念仏の声だに口に絶えせずば

御名よりひらく信心の花

といっている如くに、宗祖のモノに聞き々々しているうちに、宗祖のお言葉にオノツカラ化せられて「ああ、そうかー」と、気づかされることになると思うことです。

はじめから〈随順しよう〉〈信じよう〉としないで、とにかく、聖人のモノに親しみ、親しみ、聞いてゆくことにつとめることが、聞法の実際としては大切と思うことです。

そうしている間に、自然法爾に〈随順〉とか〈信順〉とかいうことになってくることでしょうか、まず宗祖のモノに親しむこと、まず念仏なら念仏を称えることが、親しむということでもあります。

はじめママ子のつもりでいても、その父母に親しみ親しみしているうちに、〈ああ、ママ子ではなかった、ホントの親だった〉と気づくことが出来ることでありましょうから、まず、ナニカにつけて、宗祖のモノに、問題、ギモンをぶつけて〈これはどういうことでしょうか、これはどういふことでしょうか〉と、問題をぶつけて、宗祖のお言葉中に、その答えを探しに探すことが大切と思うことです。『歎異抄』についても同じことです。

信心正因 称名報恩

ということも、蓮如上人の時代は、カラ念仏だけ称えていて、ソレデヨイと思っているイワユル念仏の徒が多かったの、称名は報恩である、信心こそ正因です、と強調しなくてはならない時代だったのではないかと思います、今はそうではない。

今は〈信心〉ときえいえば、〈自力の信心〉でも〈他力の信心〉でもおかまいなしといったようなことで、〈念仏〉はない時代になったので、一層〈念仏往生・信心正因〉と、念仏の大切さを強調しなくてはいけない時代だと思ふことです。

念仏を強調といつても、それは、本願は〈念仏往生の誓願〉なのですから、〈念仏往生〉を強調するのは当然のことと思ふます。それを強調しない方がオカシイので、お西流の説教はいただけません。また、〈念仏〉ということとは言うのは言うが、今のお東のような哲学的、観念的な念仏ではなくて、ホントウの念仏は

ただ声に、口に称えるのが、ホントウの念仏で、そんなにむづかしいリクツツポイ念仏では、賢者は助かって、われわれのような愚者は助かりません。(続く)

《任職雑感》

自然科学ではよく「眼(視覚機能)が生じたから光を認識できるようにになった」という。それも一つの視点であろう。しかし、もともと光があるから、それを見る眼が生まれて来たとも云える。光のない深海の生物には眼がない。それは光がないから眼を必要としない。眼が必要ではないから眼が生じない。これを意識と

脳の関係で考えてみれば、意識のはたらきがそもそも無ければ脳(神経細胞)は生じなかつたと云える。2ミリほどの蜘蛛にも意識がある。ごく小さな生きものにはいわゆる〈脳〉というようなものはあるとは思えないが、しかし神経細胞があり、それがあれば意識活動がある。人間が考えているような脳はなくても神経細胞の集積があれば、意識作用はある。そうすると意識と神経細胞の関係はどうなのか。

神経細胞が生じて初めて意識が発生したと、多くの科学者は当たり前のようであるが、意識的精神的な領域が潜在的にまずあるから、知覚機能として神経細胞が生まれたいとも云える。すなわち、潜在的に意識活動があるから、それに応じて脳という神経細胞の集合体が発生したともいえる。

西田幾多郎が『哲学概論』に「論者は、宇宙はもと単に物質的であり、その宇宙発展の段階で生命が現れ、更にその生命がある程度にまで発展した上で意識が生じた、このやうに意識は結局物質から生じたのだから物質が意識よりも根源的であるという。しかし物質がまづ現れたのだからと云って、直ちに物質の中に精神的なものが潜在的に含まれていなかったとは云えないであろう。むしろ世界の根底には潜在的に精神的なものがあり、それが物質の発現を可能ならしめたのかも知れない。少なくともそれは、人間の本質が幼児の最初から明瞭には現れないという如きものである。とにかくこの議論は潜在というのを忘れた議論なのである。時間上後に現れるものが却って本質的なものであるとも云えるのである。」といっている。それであれば、脳はある時生じてある時その活動は停止(脳死)するが、それによって意識の領域も消滅するとは云えない。